

本書の構成

本書は、学会10周年記念事業として、「環境アセスメント学」の体系化を目指し、本学会の各専門領域の学者・研究者、実務家、行政担当者の創意をあげて、編集企画し、刊行するものである。環境アセスメントに関する実務と理論には多くの図書や情報があり、それらを網羅的に記述するには無理があり、また大学や研修等での教科書としての制約があるため、テーマを絞ってコンパクトに編集している。本書の構成は次の通りである。

第1章：「環境アセスメントとは何か」と題し、本学会企画委員会小冊子ワーキンググループが作成した「環境アセスメントを活かそう『環境アセスメントの心得』」を参考にとりまとめている。環境アセスメントの機能と仕組み、設計、実施のポイント、情報交換の4セクションの他に、環境アセスメントのチェックリストが掲載され、本来こうあるべきという考えに基づき、記述している。

第2章：第1章の導入部から環境アセスメントへの関心、環境アセスメントの持つ社会的な貢献課題などをさらに深めることを主眼とした章である。環境アセスメントを通して、中長期の将来的課題となるようなテーマとして、21世紀の環境政策、生物多様性保全、成長管理型まちづくり、持続可能性、環境データベース、簡易アセスメントを取り上げている。

第3章：既に確立しているこれまでの環境アセスメント技術・手法を主体に、大気、悪臭、水質、底質、水循環、土壤汚染、騒音、低周波音、振動、日照障害、風害、電波障害、廃棄物、温室効果ガス、陸上動植物、水生生物、生態系、景観、自然との触れ合いの場などの各環境影響要素について、調査方法や予測技術、環境保全技術などの基礎を整理している。

第4章：環境アセスメントの実際と題して、現実の環境アセスメントは、どのように行われているのか、その概要を紹介している。火力発電所、幹線道路、海面埋立、面開発、風力発電、最終処分場、マンションなどを事例として、その環境上の特徴、主要な環境影響因子などを取り上げている。

第5章：環境アセスメント制度について、環境影響評価法、地方公共団体条例、戦略的環境アセスメント、事後調査、諸外国における制度など、国内外における制度の現状を分析し、制度に係る将来の方向性・展望について記述している。

第6章：開発援助場面における環境アセスメントを取り上げている。ここでは「JICA 環境社会配慮ガイドライン」の取り組みを中心に解説している。

第7章：「人材育成と実践」と題し、環境教育や市民活動について記述している。環境アセスメントに関連して市民あるいはNPOとして参加することが環境について学ぶよい機会となっていることや環境に関連した多くの資格制度について紹介している。

また、本書の利用ガイドとして、大学の講義テキストとして利用する場合、4単位全30回のシラバス、または、前期・後期2単位の15回のシラバスで構成する授業が想定される。その際、担当学部が文系の場合には、1章、2章、5章、6章、7章から、理系の場合には、1章、2章、3章、4章から、文理融合系の場合には、1章、2章、3章、4章、5章、6章、7章などから適宜選択し、15回ないし30回でシラバスを構成されることが期待される。